「遐い宴楽」

萩原朔太郎賞に決定

「第十回萩原朔太郎賞」は入沢康夫さんの『遐い宴楽』（とほいうたげ）に決まる――。今回は市制施行百十周年を記念し、また、この賞が十回目となることから、これまで東京都内で行われていた選考委員会も本市で開催しました。なお、賞の贈呈式と記念イベントは、十月二十七日に前橋文学館で行われます。皆さんで、ぜひ、ご参加ください。

問い合わせは前橋文学館　２３５―８０１１へ。

選考と発表が本市で

7つの候補作から選出

「第十回萩原朔太郎賞」の選考委員会が九月七日、市内で行われ、引き続いて、前橋文学館で萩原市長からその結果が発表されました。栄えある朔太郎賞に決定したのは、詩人・入沢康夫さんの詩集『遐い宴楽』（とほいうたげ）。最終候補作品七点の中から選ばれました。

これまで、選考委員会は東京都内のホテルで行われていましたが、この賞が第十回を数え、また、市制施行百十周年となる今年は、五人の選考委員が本市に集まり、受賞作品を選出しました。

なお、選考委員の皆さん、最終選考に残っていた候補者・作品名・出版社は、次のとおりです（敬称略）。

□5人の選考委員

天沢退二郎（詩人・評論家・仏文学者）、清水哲男（詩人）、司修（画家・作家）、富岡多恵子（詩人・作家）、吉増剛造（詩人）。

□最終候補者と作品

石牟礼道子『はにかみの国』（石風社）、稲葉真弓『母音の川』（思潮社）、入沢康夫『遐い宴楽』（書肆山田）、佐々木幹郎『砂から』（同）、正津勉『遊山』（思潮社）、長谷川龍生『立眠』（同）、藤井貞和『ことばのつえ、ことばのつえ』（同）。

選考理由を説明する天沢さん

＊

「われに先立ち
　逝きし蝗よ　甲虫よ」
そして　きみよ　きみたちよ

（「刀刃路」とか
「鉄棘林」とか
「血の池」だとか
「針の山」とか
そんなのはないんだらうね
何一つないんだらうね
あつたら大変だ）

ぼくが髪に挿した熊白橋の葉は
とうの昔に萎び切つた

思ひはいつも
あの宴楽へと戻つていくが
そこに戻る手段など無論無くて
戻り道のないおぼつかない旅だけはいやおうなしに続く
続けねばならない
残り火を掻きたて掻きたて
やがてきみに
きみたちに追ひつかうがために……
さびさびて
赤茶色に変色した
雁皮紙
の上を這ふ蛞蝓
その蛞蝓の
何ともたよりない足どりではあるにしても……

（作品「遐い宴楽」最終連より）